| 就職 | 退職 | 勤続 | 職名 | 氏名 |
|---|---|---|---|---|
| 明治三〇、一〇、二〇 | 三六、一一、二二（四一、一死） | 五年五月 | 元内務省土木局長、大阪府知事 | 工学博士 西村捨三 |
| 〃 〃 一一 | 三六、五、一四 | 五、八 | 突堤及内港防波堤主任 | 技師 植木平之允 |
| 三一、一二、一一 | 三六、四、一八 | 四、五 | 犬島採石工場及運搬主任 | 工学士 西尾虎太郎 |
| 〃 三、一一 | 三八、六、三〇 | 七、四 | 機械工場主任 | 〃 嘉納謙作（機） |
| 三〇、一一、二〇 | 〃 六、三〇 | 七、八 | セメント試験課主任 | 〃 工学士 高松政正（化） |
| 三一、一〇、六 | 三六、四、一八 | 四、七 | 機械工場 | 〃 工学士 鶴田伝次郎（機） |
| 三〇、九、二 | 三三、八、二九 | 三、〇 | 船渠工場主任 | 〃 工学士 丸田覚 |
| 三〇、八、一五 | 三三、六、一一 | 一、一一 | ブロック工場主任 | 〃 工学士 中川荘助 |
| 三〇、九、二 | 三八、七、二八 | 七、一一 | | 〃 工学士 島重治 |
| 三三、五、二八 | 三六、四、一八 | 三、〇 | | 〃 山寺容麿 |
| 三二、一一、二五 | 三六、四、一八 | 三、六 | | 技師 茂庭正 |
| 三一、一一、三〇 | 三六、四、一八 | 四、六 | | 技師嘱託 吉田敬徳 |
| 三一、九、一〇 | 三二、一一、四 | 一、三 | | 工学士 技手 杉卯七 |
| | 外一四三名 | | | |

なお顧問として、古市公威、斯波忠三郎（機）も関係した。



# 諸氏の追憶記

（之を見れば、沖野博士の面目が手に取るが如く、眼前に見へて、感慨無量である。）

其の一　安芸杏一　徳田文作　青山士　辰馬鎌蔵　高西敬義　筧斌治　赤木正雄　砂治国良

其の二　三池貞一郎　高松政正　宮川清　片山貞松　永井専三　新開寿之助　三浦矩明　高西敬義　谷口三郎　山内喜之助　村山喜一郎　土井八太郎　市村忠蔵

其の一　昭和三十二年集めたもの

## 沖野忠雄先生の追憶

安芸杏一

私は明治二十九年以来新潟土木出張所に勤めていた。沖野技監には四十五年初めてお逢いした。この時私は内務省に先生を訪問し、その帰りにお供して台湾喫茶店に立ち寄り、お茶とサンドウィッチの御馳走になつた。当時私は信濃川河口改修工事の西突堤堤元付堤の築造に専心していた時であつたので、その現況を説明して一度現場を御視察をお願いした。西突堤元付堤に就ては、次のような経緯がある。即ち日本海に注ぐ川の河口は一般に冬の季節風のために、年々東に移動する。信濃河河口改修は明治二十九年度に成立し、三十一年から着工した。着工当時の計画は二十五年度に出来たもので、三十一年まで四百五十米東遷しているから、当然適当なる変更を要

するのである。実施計画では河口の位置を一千米西に移し、二十五年の計画よりも更に三百米西に寄つてをる。私は川口の位置を更に三百米西に移す案を提出した。その理由は河口全体の河状から見て、その位置では洪水流心を計画に添わしむるは困難で、新河口附近の左岸はなお将来も侵蝕される恐があると思うたからであつた。併し、私の意見は容れられなかつた。河口突堤の築造と同時に新河口を洪水で開削せしめる準備を進めた。三十一年九月に待望の洪水が来た。そして見事に新川が開通した。ところがそれ以来左岸が段々欠壊が見えてきた。着工前の私の杞憂が実現しだした。約一年半後の三十三年四月の雪融け出水で、新西突堤の裏側砂洲を破り、更に新水路が出来た。これは大変なことである。大至急これを締切らねばならぬ。この工事がまた頗る困難で、或はその場所が砂に埋つたり、或は根元を洗掘されたり或は堤が度々波のために破壊されたりして、その完成には永い年月がかかつた。これ等の工事施工中先生は一度現地を視察され、元付築造の醜態を見られて御機嫌頗る悪く、痛烈なるお小言を頂戴した。私はこの醜態に対する責任を逃れんとする意志は毛頭ないが、兎に角前記の経緯を説明したが、先生は黙して何も云われなかつた。

先生がその後新潟にお出張になつた時、一夕旅館にお伺いした。その時近頃どんな専門の本や雑誌を読んでおるかと問われた。私は郷里の中学校と京都の三高で第二外国語として独語を学んだ。新潟に赴任後は仏語を勉強すべく同地の外人宣教師の教を受け、また海外出張中も三十日ばかりパリで仏語を勉強したので、専門雑誌を読むに不自由はなかつた。仏・英・米の土木雑誌や新刊書も読んだ。そして外国書店に送金して書籍雑誌を買い、その金額は身分不相応な位であつた。そんな話をしたところ、先生は大変喜んでくれ、なお激励の詞を垂れられた。先生は少し気の短い方であつた。併し親切な高い人格の持主で、叱られても不平をいう人はなかろうと思われた。



私は大正二年に本省に転勤したので、先生とは色々お話する機会が殖えてきた。同四年九月私は先生にお供して、六日間長野県下で砂防工事を視察したことがある。色々と指導を受けて啓蒙されたことが多かつた。また東京では先生の宅の近くに住んでいたので、役所のことで時々お伺いした。先生は煙草を大いに嗜好されたようで、かつて感冒で数日欠勤されたので御見舞に行つたところ、床上に起き、咳をされつつ煙管で煙草を喫われるので、タバコはお控えになるようお勧めしたら、先生は苦笑しておられたことがあつた。

## 沖野博士と那覇港修築の思出(一)

三十二年四月　　徳田文作

明治三十五年余は東京帝国大学土木学科を卒業し、直ちに内務省第四区土木監督署(名古屋、署長原田貞介博士)に奉職し、四十年頃九頭竜川改修工事に名井主任技師の下に従事している頃、沖野所長は正月の休暇の折り突然視察にこられた。当時改修事務所は三国にあつた。その時名井技師は墓参のため帰郷中であつて、余は留守番として沖野博士に初めて拝顔し、名井主任に代りて改修工事の案内を致し、種々説明応答したことがある。その後何日か経過して原田署長より呼ばれ、沖野さんが近々沖縄の那覇港を視察に出張されるから、君を随行として連れて行きたいとのことで、異存はあるまいと思うが、君は大阪の土木監督署に行き、沖野さんに面会して、出張の日や用務等、御指導を仰げとの事であつた。余は若き血気盛んな時であつて、大喜びにて応諾した。

当時沖縄県知事は沖縄知事となつて十七年間に及ぶ老人で、豪傑の誉ある男爵奈良原繁氏で(鹿児島出身)維新の志士として、活動し、後東京、青森間の日本鉄道の社長をした経歴もあつて、中央政府に対しても相当の威

信を有しておられた。当時那覇市は人口約十万と云われ、内地人も約二、三万おり、米穀その他雑貨の輸入、黒糖、泡盛（蕃焼酎）等の輸出が盛んであつた。その頃内地の調味料として黒糖は欠くべからざるものであつた。右の輸出輸入は那覇港より二千屯乃至三千屯の貨客船が一日置き位いに沖縄商船会社、大阪商船会社、日本郵船会社、沖縄の広運会社の手によつて交通を営んでおつた。那覇港は沖縄の北端に近き那覇市に湾入せる狭隘の珊瑚礁間の入江であつて、入江の入口は水底に珊瑚礁伏在して、水深は吃水十四五尺以上の船舶が干満差約六尺を利用しても、不可能或は危険な程度であつた。特に四季暴風頻繁且つ長日に亘ること多く、その時は来航の船舶も港外の島蔭に避難して静穏を待ち、漸く港口に接近し、港外に仮泊し、艀舟で貨物を瀬取りする有様で、多大の危険と労力と時日を要したのであつた。

県民は永年暗礁除却、接岸荷役等の設備要求切なものがあつたが、成立の好機がなかなか来なかつた。奈良原知事は年々中央政府に折衝した結果、四十年頃那覇港修築は政府の容るる所となつて、工費全額国庫支弁も議会を通過した。沖野氏は奈良原知事の要請により、那覇に出張して親しく実地を視察し、計画を定むることとなつたのであつた。沖野所長に随行したのは明治四十一年四月頃であつたかと思うが、鹿児島より乗船し。名瀬経由二昼夜にて那覇港着、県庁に出頭した。奈良原知事は申すまでもなく、関係要職者と会見、懇談を重ね、時の土木課長渋谷技師の案内説明にて実地を視察し、平面図その他各種の資料を熟覧せられ、平面図により種々技術上必要なる質問を重ねられ、鉛筆で大略の設計線を平面図上に記入せられた上、余に対し「この案により至急設計の大要と工費予算の概略を分り易いように、両三日中に内地に出帆する船にて帰任に間に合うように調製せよ」と命ぜられた。予は学校を出て日なお浅く経験乏しきため一寸困つたが、大急ぎで沖野さんの指導の下で図面と



工費概算を作つて提出した。設計の大要は港の入口航路の珊瑚礁を干潮面下二十尺に必要幅だけ破砕浚渫し、港内に船の横付に適する鉄製桟橋を陸岸に沿うて長約二、三十間施設し、二千屯乃至三千屯級汽船が二、三隻安全に碇泊し、どうなり、こうなり操縦し得る水面を干潮面以下二十尺に浚渫し、桟橋に沿うて海陸連絡道路を那覇市に向つて築造することであつた。予算は大約七十万余円であつたと思う。

沖野さんはこれを見られて熟考の末「兎に角総工費大略八十万円ならば、差当りの目的を達し得るようになるだろう」と申され、本案を知事に示され、県の意向を聞かれたが、知事は「何れ県会に諮りますが、誠に結構と思うから、万事宜敷くお願いする」とのことであつた。沖野さんは「何れ適当なる担任者を決定して、精細の設計書を調製し、内務省の認可を得て、実施に移すことと致そう」と云われ、便船で随行帰任した。那覇に滞在四、五日であつたと思う。余は当時若輩で沖野さんが港湾を一見せられて、直ちに鉛筆で設計の大要を定め、工費大略七、八十万円ならば出来るであろうと苦もなく申されたる達識には、実以て感服したのであつた。

帰任して幾日かの後、原田署長より呼ばれ「君は沖縄県技師に転任して過日調査の那覇港修築工事の担当者として働いて貰うよう沖野さんから申込まれた。君も若いから経験のある部下を差し当り数名持つ必要があり、今まで君が知つている技手、工手を連れて行きたいと思う人物は、出来るだけ吾々が心配するから、亦君の後援は沖野さんは勿論吾々も相談に応ずるから、是非奮発して見ては如何」と云われた。余も或いはこんなことになりはせぬかと思わぬでもなかつたが、何分経験浅き吾々若輩には自ら省みて不安を感じ、また内務技師に新任して年月浅く沖縄県技師に転任することは何だか島流しになるような感もあり、転任に関する条件や将来内務省に帰任出来るや否や等について少々勝手な希望を述べ、家庭の事情もあることとて、確答は両三日考えさして頂くこ

とにしてその時は辞去した。色　家庭とも相談した結果、承諾の旨お答へした。その時原田署長は若い時普通人が好まぬところに行つて一仕事することは、将来のため非常によいことであるから、誠に結構なことだ。僕も君の将来の成功を祈り、出来だけ後援する、何れ正式の打合せや辞令書も来るだろう」と申された。

ところが数日後大阪土木出張所長沖野博士より、余は電報で呼出され、沖野さんにお目にかかつたところ、余に対し、「君は沖縄行きについて何とか彼んとか云うているようだが、真意は如何うか」と申されたので、余は即座に誠に恐れ入りました。実際は私に取つては重荷と思いますが、皆様の御指導御援助の下に那覇港修築に従事することは大いに喜んで居りますが、家庭の事情もありまして、勝手のことを云うて済みません。茲に更めて喜んで行きますから宜敷く御指導御援助をお願い致しますと答えたところ、そうか「それでよく分つた、手続をするから左様承知せよと」申されました。余は何か外に御用事はありませんかと伺つたところ、これで安心した。直ぐ帰任して宜しいとのことであつた。僅々五六分間であつたと記憶する。

愈々沖縄県技師任命の辞令を拝受して、差し当り単身赴任し、臨時築港課を新設され、工事認可を得るための実施計画調製に従事し、傍ら適当の技術者を選定し、一、二ヵ月の後、議案を県会に提出し、首尾よく通過成立した。依つて直ちに認可申請書を携えて上京し、内務省土木局と折衝し、意外に早く認可を得て帰任した。愈々工事着手のため、組立修理工場、機械工場、倉庫その他の設備に取掛り、一面ロブニッツ専売砕岩機を大蔵省横浜税関より借り入れ、輸送組立、バケット浚渫船第一、第二竜宮丸の設計入札、廻航、元内務省大阪土木監督署所有の曳船石山丸解体と輸送、組立、その他諸種の準備に多忙を極めた。これ等はみな沖野、原田両所長、名井技師その他の親切なる人々の援助の結果にて、万事好都合に運んで、工事も順序よく運んだ。併し時に意外の失



敗もあつた。赴任後満三ケ年にて大体目鼻もつき、平壌丸（約二千余屯）級の汽船も首尾よく新桟橋に横着け荷役を始むを見て、甚だ愉快であつた。そこでそれとなく内務省へ帰任の勝手な希望を冗談半分に申し出たこともあるが、望み叶いて、明治四十四年四月十一日付内務技師転任の辞令を拝受し、次いで四十四年五月二日付で欧米各国差遣の辞令と別に「英・米・仏・白に於て港湾並に河川に於ける浚渫および削岩の視察、特にロブニッツ式砕岩機使用および効果を調査すべし」の辞令を拝受した。これ全く望外の仕合せであつて、終生此の如き喜びを感じたことは未だかつてなかつた。原田所長の「若い時人の好まぬところで辛抱すると先のためが良い」と励まされことが実現したなと思い当つたのであつた。

## 沖野技監の温情忘れられぬ一場面（二）

大正五年の春頃、余は内務技師北上川改修登米工場主任として勤務中、突然鮎川義介氏（中学時代より大学卒業までの同窓）来訪し、氏の義弟久原房之助氏と協力して戸畑製鉄所開設に当り、余に土木関係を受持つてくれとの相談を受け、食事を共にし、種々話し合つたが、最後に余は「君の厚意は大いに感謝し、余の将来に得難き光明と思うが、余は先年官命にて欧米を視察し、今もつて報告書も完了せぬ次第で、自己の都合で多大の恩恵を蒙りおる内務省を辞し去ることは、余の良心に恥づるから、今直ちに君の親切に甘えて応諾するは心苦しいことである。二、三の先輩に相談の上何とか返事する」と云うて別れた。その後名井技師、原田博士等にも相談した。後に聞いたことであるが、鮎川氏は時の土木局勤務中の岡崎芳樹技師に面会して余との懇談事情の成立をお願し

たとのことであつたが、時の仙台出張所々長市瀬博士には直接身上を相談することを憚つておつたのである。余の決心容易につかなかつた折、或る日沖野技監より電報来り、「何日何時青森行汽車仙台通過の時面会したし乗車待つ」の意味であつた。余は何の事情か分らぬが兎に角その時刻に乗車して沖野氏に面会した。技監は北海道へ御出張の途次であつたが、余に対し、温顔で「君は久原の戸畑製鉄事業創立の土木関係担任のため鮎川と云う人より要望されているが、今もつて確答しておらないと云うことだが、如何う云う訳か」と問われ、余は「お話しの通りでありますが、実は自己を省みて内務省の恩恵により、欧米視察の光栄に浴しながら、自己の都合により内務省を辞し転向するは良心に恥じて、篤と考慮しておりますと」申し上げたところ「君の申分は御尤もだが、欧米視察云々と云うが、その新知識を国家的民間事業に有意義に活用することは決して不義理ではない。多分君は承諾するであろうとの皆の話しから、君の後任も定めているが、若し君が内務省に残りたいと云うことならば更に差支えないが、場合によつては任所を変更することになるかも知れぬ、能く能く考えて早く決心することだ」と色々親切なお話を受けて、遂に転向を決心し、相変らず将来の御愛顧後援をお願して別れたのであつた。数年の後、財界不振を来し戸畑製鉄会社は八幡製鉄所に合併し余も再び転向すべき時となり、原田博士に相談の結果、若松港築港会社々長松木健次郎氏の要請に応じ、同社の技師長として洞海湾若松港の開発に努力することとなつた。その後沖野博士に面会の節同博士より洞海湾は日本でも中国九州中最枢要の港で日本産業に重大なる将来を有するから、最善の努力を尽して邦家のため働け」との激励の御言葉を受けたのが、最後のお訣れであつたと、今に思い残して居る。京都黒谷の御墓に詣でた時感慨無量で暫くは去る事を得ず、御生前の恩顧の数々が胸を圧したのであつた。



真田附記

名井氏は君が久原へ行つた時、東京土木出張所部長であつたが、戯れに一狂歌を作り沖野博士の御覧に入れたところ、馬鹿めと叱られたとのこと。

止められて（登米）先の望は内務省（無い）徳だ〳〵（徳田）と飛んで行く腹（行く久原）。当意即妙の名句ではないか。

## 運命の皮肉

三十二年三月　　青山士

僕は学校卒業後パナマ運河に居り、明治四十五年帰国して職を求めておつたが、恩師広井勇先生に紹介状をもらつて内務省の近藤虎五郎課長に面会したが、近藤先生は「君は何年に学校を出たのか」と云われて、三十六年ですとお答えした。一寸お考えの後「それでは荒井釣吉、市来尚治両君と同年だな」（この両人は已に内務省に就職しておつた）「それでパナマでどんな仕事をしておつたか」と云うことであつたから、測量、地質調査、製図、設計等をしておりましたとお答えしたら考えて「その内通知するからまた来るように」と云うことであつた。数日の後採用が決つて、先ず広井先生のところへ伺つてそのことを報告しましたら、先生は、「それはよかつた。併し君日本の官吏になつたら「トコロ天」になつたと思つて辛抱しなくては勤まらんぞ」と御注意をして下さいました。それから内務省へ出頭して沖野技監に御面会した。沖野さんは「君はパナマで働いて居つたと云うから、削鑿の方も見て居つただろうが、信濃川大河津分水路の掘鑿の方へ行かんかと云われた。僕は一寸考えて見たが

土石掘鑿の方は見飽きて居つたから、分水路の方へ行かなければ御採用出来ないと云うならば、私は内務省に入らなくてもよいと云い切つてしまつた。そうすると技監は暫くお考えになつた後「そうか、それなら荒川下流改修工事にも仕事があるから、その方へ行つてもらうかなとお話になつて、東京土木出張所の荒川改修従事の辞令をもらつたような訳であつた。そこに勤務すること約十五年で、その後大河津自在堰の事故が、昭和二年の夏に突発したので、その後始末に行くことを命ぜられ、同年十二月吹雪の中を赴任した。その時は勿論分水路の掘鑿は終つておつたのであるが、遂に新潟へ行くことになり、そこに六年半ほど在勤することになつて仕舞つた。運命と云うものは不思議なものだと痛感した。その位いのことで沖野技監との接触は極めて少なかつた。

荒川改修工事に従事中二三度巡視に見えたが、いで立ちは革の長靴で、細かいことにも注意せられて、築堤土中に芦根等の雑物が入つていると取除くことも注意せられたことを覚えている。なお明治の末期頃は工事も段々機械化され、材料も煉瓦からコンクリート、鉄筋コンクリートに変りつつあつた。僕が荒川に従事中、先ず岩淵水門の設計に取りかかつた時、基礎を杭打にし、その上に鉄筋コンクリートの広い床板を載せることとし、外の部分はみなコンクリートまたは鉄筋コンクリートとして、時の東京土木出張所長近藤仙太郎氏と沖野技監のところへ承認を求めに行つたところ、技監は杭打と床板に就いては大いに批判せられ、杭打を止めて井筒基礎とし、床板を廃するよう主張せられたが、僕は若気で広井先生のトコロ天の比喩も忘れて、工期の短縮と工費の節約を主張して譲らなかつたところ、丁度下関土木出張所長原田貞介さんが来合せて居られ、妥協案として杭打を止め、井筒基礎とし、鉄筋コンクリート床板を併用すると云うことで承認を受けました。

以上沖野技監の設計および施工に就ての細心の、御注意は深く敬服している次第であります。



# 沖野博士の恩寵を顧みて

三十三年八月　辰馬鎌蔵

明治四十年八月、恩師大藤高彦博士の推薦により内務技手拝命内務省大阪土木出張所長沖野博士の下、淀川改修第三工区に勤務す。主任は金森鍬太郎技師、工事は瀬田川洗堰工事で殆んど竣功し、浚渫が残つておつた。

所長の当工区巡視は小高き大日山に登りて展望し、後、事務所にて挨拶を受けらるるが恒例である。九月頃の巡視に、気六ケ敷いと云わるる所長は殊の外御機嫌よく、金森技師の平素より調査研究せる洗堰上下流水理曲線図の説明を一々うなずき聞き入られた。何を思われたか、突然鉛筆を執り、一気に「ハイドローリック、エクエーション」をかき下し、水位関係をソルブするには斯の式によるのがよいと思うと云われ、同意を求められた。金森主任はまごつき、判らないので同意することも出来ず、傍におつた自分に前へ前へと椅子を進めさせ応援を求められたが、自分も知らない「エクエーション」なので合槌の打ちようもなく二人共冷汗をかいて黒星を頂戴した一幕であつた。お帰りの際自分を招き、「金森君は出来る人であるから能く見習つて勉強し給え」との温き言葉は今も耳朶に残つている。

明治四十二年第四師団工兵隊見習士官を終つて再び大阪土木出張所勤務となり、淀川第一工区阪本工区主任技師の下、西島閘門工事を担当す。某日、設計図面を携え阪本主任に連れられ所長の許に出頭す。あの鋭い眼が「ピカッ」と光り、鉛筆を手にして「こんな翼をつけてはいかんといつておるに」と強い言葉にて×をつけて消された。主任は唯ハイハイと言われ形勢甚だ険悪であつたが、所長は直ぐ言葉を和げて自分を手招きて、図面上の欠

点を注意せられた。その態度は子供には厳格であるが、孫にはやさしい所長振りであつた。後で主任は、所長は忘れておるかと思つたのに覚えておつたと笑われた。この工事は締切りはしても水替はせず、従つて水中「コンクリート工事にてやれとの所長命令なので主任は非常にその工法に苦心せられ、旨い方法を考えられたのでその通り施工して順調に進行した。ある日、阪神電車内にて神戸より通勤せらるる所長に出くわしたから早速工事の進捗状況を報告すると「それはよかつた。明日見にゆくから主任に伝えよ」と、翌日所長は現場に見えて「能く出来上つたではないか」と御機嫌誠に美わしく、数々の注意を与えられ、一同面目を施した一幕があつた。待て暫しのない指導振りの熱心さには頭が下る思いをした。

明治四十四年十二月内務技監として初の巡視を遠賀川芦屋工場伊佐坐見張所に迎えた当日、一行は直方町より車を列ねて左岸堤防に沿うて下り、先頭は南斎工区主任、次に沖野技監、原田所長、片山技師等であつた。

見張所工事は高水敷掘鑿工事で出場人夫約数百人、降りしきる雨を物ともせず、人トロ、馬トロにて作業せる光景を極めて上機嫌で御覧になつた。

一行見張所にて一時休憩の際、年末「ボーナス」の御礼を申し上げしに、「君の技師初任給が間違つておつたから今回特別に昇給さした」と喜ばされた。

一行は再び車上の人となり芦屋町に降り、河口浚渫を視察し、芦屋工場事務所にて昼食を差し上げた。九州名物料理鯛ちり、鯛茶漬を食道楽の技監はこれは旨い旨いと舌鼓打つてたべられた。その風貌は今なお目に残つておる。二木医学博士の栄養食の話が出て、「そりや困る、食道楽が出来なくなる」と食通の原田所長と笑い話に花が咲いて御機嫌いとも美わしく帰途につかれた。



大正五年二月、原田所長より呼びつけられ、下関本所に出頭す。所長は技監よりの手紙を見せ、こんな鄭重な手紙は技監より貰つたことはない。能く能く見て直ぐ東京の方へ転勤し給えとの命令を受けた。手紙の内容は次の通りであつた。「遠賀川改修工事は既に末期となつている。この際辰馬技師を東京土木出張所に転任せしめ、真田技師の下につけ修業経験せしむることは、その人の為にも良いことであると思うから御了承御割愛を請う」と云う温情のこもつた御手紙であつた。この年三月、六ケ年間務めた遠賀川を離れ、真田工区主任の下で利根川第三期改修工事に従事した。

大正七年春、新らしく初まつた多摩川改良工事担任を命ぜられた。この夏技監は退職せられ、神戸に居を構えらる。大正十年三月二十六日病篤く遂に逝去せらる。父を失つたような淋しき気持に襲われ、過ぎし日の恩寵の数々を想起し、謝恩の念を何一つ実行することなかつた不孝の子の思いして胸痛むのみである。嗚呼、

## 神戸港と沖野博士

三十二年三月　高西敬義

私は沖野博士が神戸港の顧問とか嘱託とかであつたとは聞いていない。されども時折見えた（真田補正・沖野氏は明治三十一年神戸市の委嘱を受け、小野浜方面の築港計画案を立て提出し、三十九年大蔵省臨時建築部顧問となり、鉄筋コンクリート、ケーソン繋船壁築造を断行された。四十年一月大蔵大臣官邸にての技術協議会に特別委員として出席され、顧問はその後十四年間継続した。また古市公威氏は十二年、中山秀三郎氏は十六年、寺野精一氏は七年続いた。また臨時神戸港設備委員会委員として関係されたのである）私は明治四十年から大蔵省

の神戸港の仕事に従事した。四十二年頃には熊内の関西学院の西寄りに住んで居つた。私の宅北半町程の上筒井に沖野さんの立派な邸宅があつた。毎朝七時頃には早くも前面の大根畑の畦道を通つて、阪神電車の春日野停留場で乗車し、大阪の内務省土木出張所に通われていた。私はその頃時折出逢うた。宅が近いので夏の夕など時々お宅を訪ねて御高説を拝聴したこともある。私が大蔵省に入つた時、神戸港には吉本、丹羽、森垣の諸氏が居られて現場主任は森垣氏であつた。

繋船岸壁は大体前後二列の並杭を打ち、その間を水中コンクリートで塡充して壁体幹部を構築し、その上部に石積壁を造ると云う案であつたが、その内間もなくロッテルダム港のケーソン岸壁工法が報道され、早速森垣技師がその調査に出張した。その後幾ばくもなく沖野博士はその工法が神戸港に採用し得るや否やを検討された。その結果、採用と決定した。そのケーソン製造はロッテルダムでは乾ドック内で製造しているが、神戸の地質は博士や山崎鉉二郎氏の川崎造船所乾船渠築造の苦難に鑑み、バルセロナ港における工法を参酌して、櫛歯形桟橋およびクラーク式櫛形浮船渠を使用することに決定したのである。鉄筋コンクリートのこの巨大なケーソンを採用したのは日本最初であつた。クラーク式浮船渠は川崎造船所にて製造することとした。私は森垣技師指導の下に櫛歯形桟橋築造現場を担当した、桟橋が一部完成すれば浮船渠歯形現形の遣形を挿入してその適否を検査することにしていた。或日沖野さんが工場見張所に来られ、昼食を共にした際、吉本、森垣両氏は、折角沖野さんの訪問であるので、その既成桟橋と出来たばかりの浮船渠の操作を一覧に供したいと云うので、まだ完全に遣り方挿入検査が未済であつたが、是非その日の午後に船渠を桟橋に入れて見ようとの注文であつた。私も幾分の不安はあつたが実状を説明して、兎に角やつて見ることを承諾した。ところがその席で聞いて居られた沖野さんは



今日は止めた方がよい。初めてのことだから万事に大事を取れ、兎に角今日は止めよと云われた。私はその時初めて沖野さんと云う人は万事に大変注意深い人であると云うことを感じた。

また或る時沖野さんの宅を訪れて雑談中のことであるが、神戸港の工事は大変捗取つて、今の第四突堤の道路を施行中であつたが、その突堤の東側は捨石造りの護岸であるので、時化でもまれて埋立地の土砂が捨土の隙間から脱出して路面の一部に凹みが出来た。その晩何気なく談話中その事を話したら、意外にも沖野さんはその陥没のことに意を払われ、あとからあとからと細かい質問を繰り返された。私はそんな積りで話したのでもなかつたから、応対に面喰つたことがある。その時も平素は細事にこだわらない性格の人と思うていた私には、なかなか注意深い人であると思うた。

沖野さん自身がそういう性格だから恐らく部下がボンヤリしている場合とかヘマな質問でもすると、或は一喝を喰うであろうし、吾々の先輩でも叱られて一言もなく引き退つたと云う話も聞いている。併し半面非常に人情味の溢れた良いお爺父さんとの話も聞いている。或る時私が上筒井の氏の邸宅附近に住んでいた時、沖野さんの宅から一包の鳥肉が届けられた。これは但馬（お国元）から態々送つてくれたのだが、珍らしいからお分けすると云うて鶴の肉を届けられたことがある。吾々若輩のところにわざわざ送り届けてくれた厚意に対し、私は自分の親から貰うたような気がして難有く賞味したことがある。

## 沖野内務技監の追憶

覓　斌　治

私は沖野さんとは年代が違うので書くことは余りありませんから、ただ見たり聞いたりしたことを書きます。

明治四十五年七月学校を卒業して、広井勇先生（東大教授）から内務へ決めて頂いた。同期生の伊達光三と来島良亮と三人で内務省に近藤虎五郎先生（土木局監理課長で東大講師）を訪ねました。近藤先生は先ず技監に紹介すると云つて、沖野さんの室に連れて行つて呉れました。その時吾々が偉い先生と思つて居つた近藤先生（当時全国府県の土木技術者の元締で権勢並びない人と聞いて居つた）がいとも丁寧に、沖野さんに吾々三人を紹介されたのには吃驚して、沖野さんと云う人は余程偉い人だと感心し話合いました。その際三人は先輩から、就職したら休めないから緩つくり就職するが良いと聞いて居つたので、沖野さんに故郷の親の処に行つて来ますと申したら、ニコニコうなずいて居られました。

愈々就職して見ると、私は利根川第三期改修の尾島工区の片山貞松さんのところに、伊達は栗橋工区で、併し当分は第二期改修の中川吉造さんのところに、来島は田中工区の真田さんのところに配属されました。私の行つた尾島工区は翌年の大正二年四月一日事務所が開設されましたが、その時は山本権兵衛内閣で原敬氏が内務大臣で、その六月に行政整理で内務省土木関係からも多数勇退されました。東京土木出張所の所長近藤仙太郎さんや新潟の小柴保人さん等が勇退されて、東京は中原貞三郎さんに代りました。また治水費も節約することになり沖野さんから直接の命令で主任の片山さんに尾島工区部内の掘鑿面を一尺高めて掘鑿土量を減じて、工費を節約することになりました。それは洪水量に対する横断面積計算に現在の低水路断面積を入れずに、余裕としてあつたのを計算に入れて、それだけ高水敷掘削面を一尺上げる計算で、私はそれをさせられました。全く技監直接の陣頭指揮でありました。



その後尾島工区も段々工事が進んで、沖野さんは年に一度か二度現場に来られました。尾島工区の上流半分位は掘削土は砂利多くして築堤土が砂利で漏水せんかと心配しておつたところ、沖野さんが来られて、砂利混りの土を見て良い築堤土だなあと云われたので一同驚いが、築堤土の心配は解消しました。砂利ある辺の川の築堤は砂利混りでよいので、洪水期間が短いから一向これで差支えなく、出来たものは形ちが崩れず丈夫な築堤で、未だに利根川の八斗島附近の堤防は立派に現存して居ります。

大正三年度の冬期に利根加用水の樋門工事を私がやつておつた時に、沖野さんが見えて、非常に堅い地盤に杭打基礎をやつて居りましたが、杭が入らなくて苦心して居つたら、そんな処に杭を無暗に打つて地盤をこわしてはいかんというて、短かく杭を切らされました。基礎といえば何でもかんでも杭打せねばならんと思うておつたが成る程と合点したような事でした。

沖野さんは送り迎えの嫌いな人で（原田さんも左様であるが）いつも現場に一人で人力車に乗つて来て、また一人で人力車で帰つて行かれました。一度も尾島工区では泊られたことはありません。初めての現場では誰一人案内に駅に出させるだけで、一人でも余計の人が来るのは嫌われました。至つて手軽の人で、汚ない小さな見張所へ来て、田舎の塩餡入りの大福餅でお茶を呑んだり、昼食には見張りで深谷葱の鶏肉鍋で非常に満足されました

またこういうことがありました。所長の中原さんが大正二、三年頃洋行中、一年間位い東京所長を兼ねられ、吾々工費雇の学士は二ケ月に一度東京本所へ帰所させられて、高等官食堂へ出ましたがその時沖野さんは定工夫には今まで内の字を背中に染出したハッピを支給して居つたが、最早洋服時代だから廃止しようではないかと云われました。その時に渡良瀬川の主任の安達辰次郎さんが「乞食の経済」と云うてヒヤカシ詞を出しましたら「何

を」と云うて叱られたのを覚えています。それ以後ハッピの官給は止めになりました。その後大正六年に淀川が大洪水で、大塚で破堤して鉄道が長い間不通となり、琵琶湖の水を流す流させぬで大騒ぎがありました。其時博士は原田貞介、三池貞一郎、坂本助太郎さんを連れて支那の天津の大洪水の始末に支那へ招聘されて出張され、留守でありましたが、淀川大洪水に最も淀川に詳しい沖野さんに早く帰つて貰うようにと新聞に出ました。帰つて来られてから、天津の洪水の話を東京土木出張所で一同に聞かせて呉れました。吾々は大変感心して聞さました。その時工務部長の名井九介さん（後に北海道の勅任技師となり、北海道一切の土木の総指揮をやられた人）が雨量はどの位ですかと聞かれたら、沖野さんは、そんなことを聞くようでは支那の治水は出来ないと、名井さんを叱りました。吾々が偉いと思つている大先輩の名井さんや安達さんを目の前で子供のように叱られるので驚さました。

また東京土木出張所では、毎年忘年会を柳橋の柳光亭でやり、全改修事務所から、何人かづつ帰所を命ぜられて出席するので、盛大な宴会でありました。これは殆んど欠かさず沖野さんは出席されたようでありました。吾々は最も若い同期の三人で、一緒にお流れ頂戴に行くと非常に喜んで、なお激励の言葉を下さいました。

また主任の片山さんから聞さましたが、沖野さんのお宅の牛込には名井、比田、片山、坂田貞明さんなど土木関係の人が多数住んで居られ、その誰れかが正月の年始に沖野さんのところに行つたら沖野さんは高等数学の六ケしい原書を元日に読んで居られたとのことでした。

明治四十三年の大洪水後は膨大なる治水事業を成立させ、その初代の内務技監としてその陣容、組織、施行を原田貞介さん（二代目技監）を参謀として大いに全国に施行されました。沖野さんは(1)適材適所主義で(2)充分調



査研究して計画する(3)事務や雑事は出来るだけ簡素に(4)工事本位に(5)自分が最先に立つて指揮された。実に明治の末年頃から大正年間は勿論、昭和の大東亜戦争までの内務省治水事業の華々しい工事の基礎を作られたと思います。(1)の適材適所や(2)の調査研究としては沖野さんと同じ位い元老の方々に勇退して貰つて、各土木出張所長の陣容を建て直し、原田さん（独逸の大学卒業の人）を参謀として調査課長に宛て、市瀬恭次郎さん、金森鍬太郎さん等を集めて徹底的な研究をさせられ、なお物部長穂さん（後東大教授、土木試験所長）を理科大学に現職のまま、入学させて数学を勉強させたり、学校で優等生であつた並川熊次郎さんや福田次吉さんを二年間独逸に留学させたりして、人材を養成され、調査課には有為の人を集めて充分研究させられました。

また(4)の施工には各自が競争的に施工に励むように仕向けられ、また当時としては最も進んだ機械を採用して能率を挙げさせられました。次に(5)の陣頭指揮の一例と見られることは、私は大正十一年以後約五年間中川改修をやりましたが、その中川本流のやや上流部に利根川の元派川権現堂川敷を新川敷にした部分があります。其処に一の可動堰があります。中川改修は関東一の大悪水路であつて、直轄河川中の最大附帯工事のようなものであつたと思いますが、沖野さんの計画で水利組合を纏めるのに非常に骨を折られたそうです。この権現堂川の右岸を切り割つて上流約一万五千町歩の流域の水を新たに流す、流させぬの論争で、上流と下流で纏まらなかつたのを、大正四年二月沖野さんは所長の中原さんと技師の山根三樹さんを連れて、熊々埼玉県会議事堂に赴さ、上下流関係者一同を集めて説明された。その時此権現堂川右岸堤を開削するところに堰を作つて洪水の際調節するからと云われた結果、上下流一致して中川改修工事となつたのであります。即ち沖野さんは内務技監であるが、直接地方にまで行つて説明納得させられた陣頭指揮の一例であります。のち昭和二年私は中川主任としてその堰を

造りました。

次に沖野さんは予算を自身握つて、多く進工するところにはその方へ予算を廻わし、難工事や種々の事情で工事が遅れるところには、研究せしめて工費を後廻わしにする。即ち予算をもつとも有効的に使われたようです。こんなことは今日大蔵省が八釜敷しくて出来ぬでしようが、幹部はこの精神でありたいものです。

以上甚だお粗末ですが沖野さんの偉かつたことが思い出される次第であります。

以上

## 思い出

三十二年九月　赤木正雄

先師沖野様に受けた思い出を一、二記することにする。大正三年大学を出てから沖野技監に採用願の面接試験に内務省に伺つた。私は林学出で学校からの推薦ではなく、土木局長久保田正周氏の口添えによつたのであつた。技監はその時私に山に木を植えることを教わつたかと問われた。私は本多博士から三ケ年教わりましたと答えた。砂防工学を大学で習つた者としては、この技監の質問は余りに意外なので、少々あつけなく感じた。技監は内務省には百三十五人の技師がいる。併し日本の河川は水源を治めない限り治まらないが、土木卒業の学士は皆山に入ることを嫌うので、誰か一人砂防専門の技師を採用しようと考えている。君を先ず採用することにすると簡単に採用が決定した。技監は語をつぎ、若いうちに現場に出て充分実地で習わない限り、技術家の将来はない。君には淀川の下田上の現場に行つてもらおう。俸給は五十円だが八円の月額手当がつくので、大津から船で通こうとも出来ると話された。その時技監の机の上を見るに、山梨県日川筋の水制による砂防工事の計画を自ら



作製して居られるのに気がついた。

大正五年の頃私が徳島県吉野川支流曾江谷川の砂防工事に従事していた時沖野技監が視察に来られ、河幅二百間もある曾江谷河原を見て、ここに何か植樹出来ないかと尋ねられた。その時私が植えた松が今日川の両側所々にある大さな松である。これは技監の良い記念物である。その頃曾江谷川や上手の日開谷川は共に崩壊土砂の押出しで川幅七十間乃至三百間もあつたが、これに高六尺乃至九尺の長百間内外の空積床固め堰堤を階段状に作つた。その頃の設計は空積でコンクリートは使用されなかつた。私は種々気付いた点があつたが、設計の訂正は主任の許可を得られなかつた。（主任は吉野川改修田中吉二技師の兼務であつた）堰堤は折角出来たが、洪水毎に破損する状態であつた。大正八年に原田技監が曾江谷川現場へ来られた際、堰堤破損の責任上、私は辞職を直接技監に申出た。ところが技監は語を改めて、沖野さんが君を内務省に砂防のため、初めて採用されたのは、将来わが国全体の砂防を見てもらうためなのだ。今曾江谷日開谷の工費を合せても十五万円に過ぎない。しかも一部破損しても残つた部分で土砂は支えているではないか、それ等の点を研究すれば十五万円が流れても今後の砂防のため尊い研究資料となるのだ。退職などは心得違いだと諭された。技監の位置にあるものはかかる態度で部下を指導すべさものと、今もなお深く感服している所である。

私は大正十二年に岐阜県揖斐川水源の砂防工事を視察して根尾谷に入つた。人力車も通わぬ山奥で、根尾村の天神堂に泊ることにした。宿屋もなく小間物屋の二階に泊めてもらつたが、その家の老婆の話に、沖野様と原田様（技監）が矢張りこの家に泊られたと聞いた。吾々の先輩がかかる僻遠の地まで踏査された熱意に全く頭が下がつた。昭和の初頃の富山県常願寺川砂防は、何と云つても日本一の難工事また大工事である。市瀬技監は私が

外国から帰るのを待つておられた。大正十四年夏に私が随行して常願寺の水源立山大鳶の頂上大崩壊の周囲を限なく巡回された。技監はその後昭和三年八月十五日病死されたが、惜しき限りである。水を治めるものは、この精神があつて初めて河の性質を知り、治水全般に亘る立派な計画が出来ることと思う。沖野様、原田様、市瀬様のようにありたいものであり、且つその伝統である旧内務省技術官の気風は長く伝えて、その粋を失わぬように致したいと念願して止みません。

## 沖野さんと私の不明

三十二年三月　砂治国良

一、二の先輩から私に君は沖野さんと同郷だから何か書くようにとの話がありましたが、私は沖野さんと同じ但馬ですが、沖野さんは豊岡で、私は三里程離れた出石であり、沖野さんが同国人であることも内務省に入つてから数年後に知つたような訳で、甚だ不明であつたことを恥じる所であります。斯様な訳で先生は余り知らないから、私が沖野さんのことを書くことは一応お断りしました。併し知らなかつたことが或は沖野さんの人柄やその時代を判らせるかも知れんと思い、敢て少し許り書いて見ました。

私は出石に生れ、明治の末期に但馬の豊岡中学に在学しておりましたが、私の少年時代から豊岡は但馬地方の中心地で、旧藩主京極氏の城下町で、出石と共に但馬では古くから学問の盛んな土地と云われて居りました。私の豊岡中学校在学当時、寄宿舎は狭くて、臨時の分寮に居りましたが、和魂寮と云つて、豊岡の町外れの八条村大磯にありました。寮は大きな農家の蚕室を改造したもので、この家の主人が沖野源太郎と云う人で、この主人



にはお会する機会もありました。同姓ですから沖野さんと因縁のあるお宅であつたかと思うのです。その寮の所は円山川改修工事の大磯捷水路の附近ではなかつたと思います。丁度旧円山川の大磯大彎曲部の凸所のところです。和魂寮附近は桑畑でしたが、洪水時には豊岡附近の村々は円山川の氾濫で一面の湖水となり、柳行李の名産地で杞柳が生育するような低地で、農家は四、五米以上の高い盛土上にありました。沖野さんは少年時代度々洪水に悩されたことと思います。その頃は東京で郷土出身者の出世した人々への憧憬は格別のものがありました。その上私の家は立派ではないが、士族で母は藩の典医をしておつた関係から、祖父母や父母から郷里の出世した人の名を聞かされたものでした。出石からは初代帝大総長加藤弘之、初代の第百銀行頭取池田謙三、県知事桜井勉、豊岡からは東大総長浜尾新、博識諧謔で有名な法博和田垣謙造、文部大臣久保田譲、その他某局長、某法博士、某医博等で、沖野さんが土木の最高峰におられたのに、私の不明のためか余り聞きませんでした。或は聞いても土木などに関心がなかつたので、忘れてしまつたのかも知れません。それと云うのもその頃は事務官に比べ技術官軽視の時代であつた為でしようか。

沖野さんは大正七年退官されるまで、河川工事では殆んと悉く関係され、故郷円山川の水害は念頭にない筈はありません。それなのに退官されて後大正九年度になつて、漸く改修工事に着手されました。私思のうには沖野さんは比較的小なる円山川の改修は郷里なりとも後廻わしにし、国家的立場に立ち、大所高所より処置されたのではないでしようか。沖野さんという方は技術に徹し、公私の明かな方で、余程名利に恬淡な、そして完名的なことは一切されなかつた人ではなかつたかと思うのであります。

其の二　昭和十年集めわもの、

# 沖野博士の思出

三池貞一郎

博士は満身是れ数学と云いたいほど数理に長けた、頭脳明晰なそして精悍な気を蔵し負けじ魂の持主で、容易に人の言を容れなかつた。自己信念の非常に強い而も英断に富んだ人であつた。そうかと云つてその反面にはまた掬すべき一脈の温情が滾々として流るるものがあつた。

博士はまた達眼達識の士であつた。人物の融通ということに就ても実に敬服すべきものがあつた。事業の性質、軽重、緩急を国家的に考えて、適材を適所に持ち行く按配というものは見上げたものであつて、一点自己本位に打算しなかつた。その場合になると自分の配下に、如何に有用欠くべからざる人物であつても、惜し気もなく夫れを割きてドシドシ必要な方面へ差向けて、自由に手腕を揮わせると云つた、普通人のチョット真似の出来得ないところであり。学ぶき点である。

我輩によく随行を命じられたが、博士は歩みの速くはなかつた方であつたが、我輩はまた歩行が兎角速い方であるから両者の歩調は、ともすると一致がとれなくなり勝であつた。勿論最初は共に俱に調子よく行くようでもやがては両者の間隔は大分の差を生じて来る。そうなると我輩は途中幾度か停つては俟つのであつた。負けぬ気の博士は額に汗してやつて来る。「ドーモ君は馬車馬のように前方ばかり見て進むようじやがチト左右前後を見極めて行くべきであるぞ……」などとよく小言を聴かされたものであつたが、「自分は足弱い方であるからチト緩



つくりやつて貰らいたい」など云つたことは一度もない。却つて今云つた通り逆襲を浴びせて来るのであつた。

博士の趣味は読書であつたようだ。暇さえあれば淫書の方で、更らに他を欲求しなかつたようである。尤も遊戯には歌留多もやり、囲碁、撞球もやつて見たが、撞球は振わなかつた。歌留多に至つては確かに一方の雄であつた。

内務省土木出張所の安田繁太郎氏が退官するときであつたが、同氏の功労に対して賞賜の恩典あるように上申書を我輩に書けと云うのであつたから簡短に認めて博士(所長)の前に出したとき、博士はウン是れでよろしい結構であると云つて褒めて呉れたのであつたが、人事において褒められたのは是れが一ツ、工事に就て褒められたのは、毛馬閘門最初の水中コンクリート工事の際であつた。熊谷技師が毛馬工場詰めでいた時である。トロをスキップで水中に落して行く場合うつかりすると、トロが水面で水を被つて仕舞うから、水中に送るに際して一気に落しては失敗するのである。そこに緩急調節の呼吸を要するわけであるが、我輩の設計はそこのコツが自分ながらうまくいつたと思つた位で、余程成績良好の方であつた。博士が視察に来て現場に着くや否や早くも見て取り、これはうまく出来たと褒めて呉れたが、滅多に人を褒めることのない博士にして、その時ばかりは大そう満足のようであつた。博士と師弟関係にある私は三十余年間、博士が心から賞辞を呉れたのは、これで僅かに二回に過ぎなかつた。

# 沖野博士記念像除幕式に際し

高松政正

故沖野博士には永年に亙り一方ならぬ御恩顧を蒙り居り殊に慈父の温情を以て御指導御鞭撻を賜りたるを想起

し、感慨無量早速追慕感謝の情の一端を披瀝致し度き所存ながら、先月中旬よりしばしば発熱の為め、想もまとまらず返す返すも心残りに堪えず候

## 沖野博士ニ対スル感想

宮川清

淀川改良計画当時ニアリテハ、内務省ノ直轄工事モ格別ノ大工事ナリ、只木曾、揖斐、長柄ノ三川分流工事ノ施行中ノ外ハ、多クハ低水用ノ沈床工事ヲ行ヒ居タルニ過ギズ、此際ニアツテ故博士ノ治水ニ対スル識見ト手腕トハ淀川改良工事ノ名計画ヲ成立セシメタノデアル。工費ノ点ヨリスルモ計画ノ内容ヨリ見ルモ実ニ一大計画デアツタ。本工事ハ独リ本邦ニ於テ治水技術標本的デアル計リデナク外国ニモ有名デアツタ。筆者ガ本工事起工後数年ナラザル明治三十三年ニ欧州土木事業視察中ニモ仏国ノ技師ヨリ計画内容ニ付説明ヲ求メラレタ位デアツタ。本工事ニ続イテ故博士ハ大阪築港ヲ設計セラレ、両工事トモ故博士ノ励精指導ノ下ニ完成シタノデアル。当年本邦ノ治水工事ハ大小一トシテ博士ノ息気ノカカラヌモノハナク、博士ノ履歴ハ自ラ日本治水史ヲナスモノデアルト信ズ、サレバ博士ガ内務技監ヲ退キタル際モ筆者ニ対シテ「俺レハ技師トシテハ内外ヲ通ジテ恥ズル処ナキダケノ仕事ヲシテ来タ」ト述懐セラレ大ニ自ラ慰メテ居ラレタ。実ニ故博士程ノ広範ナ創業的ナ事業ヲ為シタル人ハナイト思ハル。

故博士ノ部下ノ統制振リハ実ニ見事デアツタ。単ニ部下ノミナラズ、博士ガ署長時代ニアツテモ署長連中ノ「リーダー」デアツタ。署長連中ニモ大ニ博士ニ私淑シ居タ人モ多ク、万事権力関係ヲ超越シテ事ヲ運バレタ様



デアル。実ニ博士ノ徳望ノ致ス処ト思ウ。

博士ハ部下ニ対シテハ相当峻厳デアツタガ、一方中々人ニ厚ク、部下ヲ見捨テズ、其長所ヲ見出シテ自由ニ其手腕ヲ発揮セシメルト云フ風デアツタ。

博士ハ筆者等ヲ戒メラルルニハ「君等ハ部下ヲ叱ル計リデハダメダ、恩威並ニ行ハネバナラヌ」ト云ツテ居ラレタ。博士ノ行ヒ来タ処ヲ見テモ常ニソーダト感ゼシムルモノガアル。

博士ハ非常ノ愛煙家デ、又非常ノ読書家デアツタ。而モ博士ノ唯一ノ道楽デモアツタ。去レバ役所ニアツテモ常ニ葉巻、紙巻、煙管莫ノ三種ガ並ベラレテ居タ。又読書ハ技術ニ関スルノミデハナク、政治、経済、文学等ニ迄及ンデ居タ。平素余リ多ク談ズル人デハナイガ、内務省ノ食堂等デハ仏国ノ政治談、又ハ政治家ノ批評等ヲ聞サレ若キ局長連モ大ニ啓蒙セラレタト喜ンデ居ル人モアツタ。旅行中ニモ各種ノ書ヲ携ヘ一日ノ行程ヲ終レバ疲労モ物トモセズ夜中ベツトニ書ヲ繙キ眠リニ落チテ止ムト云フ筆法デアツタ。

博士ハ自宅ニ常ニ多クノ書生ヲ養ハレタ。子供ノナイ関係モアルナランガ、中々人ノ面倒ヲ見ラレタ。書生ノ中ニモ名ヲ為シタル人ガ甚ダ多イ。

要スルニ故博士ハ本邦治水築港事業ノ開拓者デアツテ、恰モ伊藤、山県等ノ諸公ガ政治上ノ元勲デアルガ如ク土木事業ノ元勲デアル。

## 沖野博士の回顧

片山貞松

沖野博士は我国土木界の長老にして最高権威者の一であつた。その経歴を語れば自然明治維新以後に於ける我国土木の進歩発達史を編むこととなる。これを語るには自らその人あるを以て、私は博士の高潔なる人格を、知り得たる事実の一端と、私淑して直接感受したる最も深き印象の片鱗を語るであろう。

私が沖野博士を知りたるは明治三十一年学業を卒えて内務省に奉職してからである。その当時は第五区土木監督署長として大阪に在勤せられたから不幸にして直接教を乞う機会はなかつた。越えて明治三十九年統監府に転任するや、私の後任、私の前途につき一方ならぬ御世話と御指導とを受けた。而して四十三年、再び内務省に帰任して始めて河川の調査改修計画並に工事施行に関し直接御指導御叱責を受けたのである。ある時御出張に随行して御高見を承り又屢々実地に臨みて指導誘掖せらるることの熱烈なりしは今猶脳裏に映して記憶新なるものがある。

去る明治四十三年荒川下流改修計画に当り荒川と中川と連絡する古綾瀬川の改修法線を朱線にて入れ御覧に供したるに大喝叱責された。蓋し法線の忽にすべからざるを論されたるの深慮である。又東京を保護する荒川右岸赤羽より海に至る堤防を馬踏八間となすべく命ぜられたるは、名古屋を護る木曾川左岸犬山より弥富に至る御囲堤に準ぜられたるものと察する。而して其年の冬、甲州に出張せらるるに随行して甲武線中、偶車窓を開けば寒いとてお小言を喰う。時に博士年五十七、私は三十八、今や私も老齢に達して見れば、ひどく寒さを感ずる老人の心境は若輩の気付かざる事ありて注意すべきことである。その節申されるには「自分は嘗て手帳を記した事なけれど、忘れつぽくなつたからこれから手帳をつけねばならぬ」と、蓋し、従来治水事業費全国三百余万円に過ぎざりしがその年始めて継続的に一億八千万円の大予算成立し、世挙つて河川改修の速成を希望し、明治四十四



年度より内務技監としてこの大事業の全責任を痛感せられたからである。

同年利根川第三期改修工事着手せらるるに当り、その実施計画予算編成に際し、土工一坪の単価まで指揮せられ、屢実地に臨み状況を視られた。私が大正二年四月利根川の工区主任として現場に駐在することとなるや、その当初に当つては頻繁に臨場を辱うしたるを覚ゆ。これ私は最も現場の経験に乏しく、同僚の援助により職責を尽し居たるを以て実地指導の思召なりしことと思う。以来大正七年四月に至る満五年間、ある時は深谷駅に又ある時は熊谷駅に出迎えれば、その必要なきを説き、実地を離れてはいかんと戒めらる。時に技監六十—六十五てある。初めは矍鑠壮者を凌ぐの慨ありしも、後年少しく衰えられたが元気は少しも変らず、折角の出迎も戒められて随行も連れられず、老人に対する思いやりも徒爾なるの憾ありたり。而して工事の実況視察せらるるに当り、進工法に適い成績る見るべきものあれば喜色満面に溢れ甚だ愉快なれども、適ま機械の故障などありて、成績不良なるときは御気嫌斜めにて恐縮の外なく、不知不識奮励努力することとなり、その為め配当予算は暦年内に使尽すの恐れあり、その不足を訴うれば、予算など心配はいらぬと一言空しからず適当の増額を与えられ進捗を謀られたり、又実施中計画変更の必要を生じたる場合、慎重に実験の調査資料を具備して変更の必要なる所以を説明するとき適当と信ぜらるれば変更施工を即決許可せらる。小山川の逆流止、樋門築造の計画を廃し、自然放流に変更したるが如き、その一例にして現場に於て変更施工の許可を得、勇躍全責任を感じて進工を謀らざるを得ざりし次第であつた。

博士は趣味道楽として別段いう程のことなかりしが如し、酒は一滴も飲まれず、強いていえば食道楽、煙草道楽なりしが、利根川に出張せらるるとき、明戸村又は島村の見張小屋にて昼食に畑より取立ての葱と、かしわの

煮付けを饗すれば頗る葱を珍重せられ、牛込の肴は古くて食えぬ（牛込榎町に住まれたり）この葱は非常にうまいと賞味せられたり、蓋し葱は彼地の名物である。また果物が一個十銭もしないでうまいものが食われる筈がないと云われた。実に今うまい果物は十銭する様になつた。また煙草は刻み、紙巻、葉巻種々吸うて居られたが、その歿後未亡人より東京土木出張所へ寄贈せられたる遺愛の煙草凡有る葉巻数百本中には全く封切らざる箱もありまた一本づつ玻璃管に封じ込んだものもある。我々同僚皆その余恵に浴し分配したが玻璃管入一本は今猶記念品として保存して居る。また以て博士の煙草に趣好の深かりし事を知るに足る。

博士が内務技監として最後の河川改修計画の一つは荒川上流である。この計画は大正七年四月より改修事業に着手したが、私はその主任技師として転勤を命ぜられ、利根川を去つて又復た新なる御指導を受くることとなつた。この川の特殊の計画は横堤の設置である。蓋し広大なる游水地を有する自然の河状を尊重して広大なる堤外地を存し游水せしむるを以て堤脚洗流を防ぎ、洪水を流心に誘導するため横堤を考案せられたのである。この横堤には頗る興味を有せられたる如く感ぜられ、我国最初の試みであるから注意施工すべき事を申された。この新計画に対し研鑽怠りなく、実施設計に当り益御指導を乞うの必要あるに際し、越えて五月辞表を提出せられた。時に年六十五。想うにこの前年病気に罹られ、恢復後も健康元の如くならず遂に意を決せられたるならん。この報を得て盲の杖を失うたる心地し追慕惜く能わざりしが、時の内務次官曰く、信頼せらるる技師一両名を技監に附属せしめて実地視察の便に供し、その復命に依り指図さるることにし労を省かんとして極力留任を懇請したるも聴入れなかりしと、素より坐して実地を指導するは技監の気質に非ず、聴入れられざりしは当然にて、惜めども致方なきを思えり、退官後神戸の旧廬に帰り余生を送られしが、大正八年出京あり、東京土木出張所に御出あり



しとき百人一首を研究して居るとの御話あり、難解のことありて面白いと承り、その後悠々余生を楽まれたが、大正十年三月溘焉として英霊天に帰り、又その風貌に接する能わず、然れどもその遺徳は後輩に伝わり、その治績は万世朽ちざるべし。

博士は人格高潔の国士であつた。一点の私心なく、造次顚肺も国家の公益と国民の福利を増進することを忘れず、その労を惜まず、技術の研鑽、後輩の誘掖も常にこの根本観念の下に実践躬行の模範を示し、人材を養成し、また国家の財政を考え事業の緩急を慮りその調和を保ち、如何なる強硬なる要望あるも、その事業を起すことが国家財政上不利益なりと信ずるときは断乎として排斥せられた。然れども一旦その事業が国家の為め有利にして済民の方策たるを思うときは、法規を顧慮するの暇なく断行せられた。これ等詳細なる事実に就ては他に述ぶべき適当なる人に譲り、私はその証左として知り得たる断片を語らん。

第五区土木監督署長として、大阪に在勤中、明治三十年大阪築港の工事長として劃策統督せられしが、その浚功に当り大阪市が議決したる巨額の謝礼を拒絶して受けざりしが如き、公人の面目を発揮せられたる証左に非ずして何ぞや、また淀川改修に当り、その計画予算に記載なき長柄運河を開鑿して会計検査院よりその違法たるを詰られた時、技術上その最善の方法たるを披瀝せられたるに依り、検査院は博士の人格に免じて不問に附することとなり、庄内古川の改修に当り、法理上その成立困難なりとて異論を挾む者あるや、大声叱呼して事業は此の如くすること最善の方法である。法規を訂正せよとて遂にその業を成し、幾千町歩の湿地を良田に美化したるが如き、また技師を帝大に通学せしめ、学理の蘊蓄を受けしめたるが如き、苟も国家有利の事業であり、国家の人材を造るに於ては眼中法律なく規則なく、法規一天張りの議論に耳を籍さず。内務省の羅馬法皇と異名せられたるも

宜なりというべし。

凡そ河川改修の如きは、常に政党の要望熾烈にしてその成立を技監に懇請すること切なり。蓋しこの時に於ては技監の諾否に依て決したから一層陳情も甚しかつたのである。然るに技監の故郷に在る円山川は累年洪水を見て一朝氾濫すれば豊岡町を没し、城崎温泉場を浸す故に郷里出身の技監たるを頼み、年々改修の陳情盛なりしも国家財政の得策とする処に非ずとて遂に聴許せず、漸く退官せられて二年目大正九年より成立するに至りたり、私は大正十二年円山川改修を主宰するに当り、沿岸の大磯に至り博士の生家を訪うてその人格を慕い敬虔の念に打たれたることあり、而して博士が所信を断行するに勇往邁進せられることは「あの老爺さんが大臣の所に行くときはすばらしき勢であつた」とは当時の若き書記官、今の某大官の語る所にて利根川辺に度々出張せられても書記が旅費を請求して上げますからといつてもいらぬと云うて居られたとはその後の局長、今のある大官の話である。

以上の如く国家公益の為に尽し国家の人材を養成する外他念なき博士の功績は偉なるものにして、在官中勲一等に叙せられたるは当然なれども、退官せらるるに際し、政府の待遇甚だ物足らぬ心地す。爾来時勢の変遷と共に内務技術界亦昔日と異なり、英霊長えに京都黒谷の山上に眠り静観せらるるであろう。我土木技術界に加護を垂れ給わん事を祈る。今淀川畔に建てらるる博士の胸像将さに竣成せんとするを聞き欣快に堪えず。然れども博士の功績は豈一淀川にて表彰して足るものならんや、重ねて我国の第一世技監として日本の功臣たるの表彰あらんことを願うて止まず。回顧談を集録せられんとするに当り微忱を吐露す云爾。



# 水力発電界の恩人

永井専三

沖野博士は吾が邦治水、港湾界に貽られたその功績が余りに大きい為め、水力発電界に於ても一個の恩人である事などを知る人が或いは少いかに思うから、以下その然る所以を述べて見よう。

今日吾が邦重要河川に於ても、水力発電用として相当高い堰堤を、処々に見受けるようになつたが、最初これが築設許可の方針を内務省で決められたのは、蓋し当時の技監沖野博士であつたのである。明治四十年頃、宇治川電気の第一期工事時代には、博士もまだ高堰堤には余り賛成でないように仄聞したが、その後海の内外に於ける土木技術の著しい進歩を認められて、明治の末期頃かには、高堰堤を許しても宜しいとの結論に達せられたようである。然も当時の内務省の情勢から謂つて、技術官は勿論、事務当局でも、技術上の斯る問題に就て、技監の所説に異論を挿む人は一人もない時代だつたから、これは一面内務省の方針と見てよかつたのである。この際第一番に築設の出願をしたのが、実にわが宇治川堰堤だつたので、これも無論許可されるべきに違いなくて、下流沿岸民諸君の猛烈な反対運動にも係らず、博士は毅然としてその所信を揺かされないで、その後技術以外の種々の事情から、幾多の曲折はあつたが、遂に築設の許可を見るに至つたのである。とは謂え、下流に淀川のような重要河川を扣えたわが邦最初の高堰堤だから、博士も特に自ら調査に当られ、南部博士を従えて宇治川の実地へも出向かれるし、引続き二日間に亘つて、設計その他に関し、微に入り細を竭した数々の質問を吾輩は受たものである。博士は先づ宇治川の下流、淀川沿岸には、わが邦稀有の豊饒なる田野が広く開け、また人家は甚しく稠

密であるし、更にわが経済上の心臓部とも称すべき大阪の大商工業地を扣えているから、堰堤の設計と施工とには特に深甚の注意を払わねばならないと説かれたから吾輩はこの堰堤は下流沿岸に多大の関係があるのは勿論であるばかりでなく、会社自体から見てもこれが成否はその死活を制するといつてもよい位重要なものなので、絶対に破壊せしめないという信条の下に、あらゆる点で最善を竭し十二分の安全さで、設計なり、施工なりを行わねばならないし、自分も勿論その決心である。されば設計の一例で謂えば、瀬田川の洪水量は従来三万個となつているが、将来如何なる豪雨が降らないとも限らないから、五万個の洪水排除を為し得る設備とし、また施工の例から謂つて、工事中の仮締切の如きは、一滴の水をも洩らさないで、堰堤敷をカラカラの場所としてコンクリートを施工するという建前から、恐らくこれまで何処ででも試みられなかつたと思わるる二重締切、即ち先ず在来の工法で普通の仮締切を造り、更にその内側に第二の仮締切としてコンクリートの拱堤を築いて、完全に河水を遮断する積りである。その他最良と思わるる工法は、工費の嵩むのを無視してもこれを採用すべく、或はこれが為め技術者として算盤を知らない篦棒な仕事を行つたとの非難があつても、それが堰堤の安全に関するものである限り、少しも構わない。巧い仕事をやつて世人の喝采を博しようなどとの考えは毛頭もなく、ただ十二分に安固な堰堤を造りたいばかりなのである。然もこれが却つて本当の経済になるものとも信じて居るのである旨答えた処、大いに微意の在るところを諒とせられ、竪子以て教うべく、この男にやらせても先ず大した間違はなかろうとなつたようである。それから南部博士が主査で、周到綿密な調査があつて、遂に許可の運びになつたのであるが、重要河川に於けるわが邦最初の発電用堰堤は、斯くの如く博士の声望と人格とに因つて、その実現を見るに至つたのである。この宇治川堰堤を魁として、爾来処々に高堰堤の築設を見るようになり、併も当初第一の反



対理由であつた、若し堰堤が破壊した場合にはというような杞憂は、最早今日では何処ででも問題ではなくなつて仕舞つて、現に庄川堰堤なども、未曾有の大紛糾を来たして、世人の視聴を聳だたしめたが、これとて流木という堰堤自体を離れた問題が主だつたのである。斯く高堰堤の実現は全く博士の賜なのだから、博士を水力発電界の恩人と呼ばなくてはならないのである。

更にまた今日のわが邦の発電用堰堤には、略ぼ一種の型が決まつておつて、形としては溢流型、堤質としては砕石コンクリート造という風になつていると思うが、これも博士が決められたといつてよいのである。宇治川堰堤は何分狭隘な峡谷に築設するのであるから、最初から溢流型として洪水を排除したかつたのであるが、当時の例としては溢水深が相当深くなるので、内務省の同意を得ることが難かしかろうとの想像から、最初は態と遠慮して別に堰堤の横に洪水吐を造る設計とし、その後内務省必しも反対でないとの意向が分つたから、更に外遊の際種々調査をした結果、帰朝後の実施設計には溢流型として出願し、許可を得たのである。次に堰質は当時堰堤の先進米国あたりでは、専ら軟練コンクリート中へ、大々的の塊石を上方から落し込むやり方だつたが、斯んな塊石の無傷なのを、宇治川の現場附近に需めることは到底不可能である一方、堰堤敷や隧道の掘鑿から、頗る良質の硬砂岩が沢山出る見込で、これは硬さ、重さ、稜、面など何れも砕石として誠に申分が無いのだから、これでコンクリートを造り、塊石は同じ石で精々四人で担ぎ得る程度以内のものに止める設計にしたところ、博士も米国流の大塊石を入れる工法は相当熟練を要し、到底わが邦の現状には不向だからとて、言下にわが説に同意せられたのであつた。もしこの時米国式にやれとでも言われたら、それこそ相当困つた問題だつたろうが、流石に卓見の士であつたので、これが今日一般に行われて居る堤質だと思うのである。次に堤踵の上向水圧は最初は静

水圧の三分の二と決めていて、南部主査も同意見だつたが、博士は静水圧と同大とせよといわれ、主査から相談があつたので、勿論三分の二で十分と思うが、併し十二分の安全という建前からは寧ろ博士の所説に賛成したいといつて、静水圧と同大とし堤断面を定めたのである。この上向水圧の大さがわが設計計画に対し、変更を慫慂された唯一の条項であるが、今日になつては一入、博士の所説に従つて置いてよかつたと、その注意を有難く思つているのである。その他博士は電力使用の季節的並に時間的変化の状況を検討して、水の有効なる利用ということを重要視せられ、淀川のような舟楫灌漑その他で相当デリケートな関係のある河川の上流で断乎としてある程度の流量調整を認められたことは流石に博士なればこそ出来たのだと思うのである。最後に博士に直接関係はないが、堤頂の洪水吐のテンター、ゲートは当時金森博士と雑談の際、不図堤頂の門扉のことに及び、吾輩のテンター、ゲート採用説に対し、同博士も最も適当であるとし、当時洗堰の門扉に就て相当造詣の深い人からこの裏書を得て大いに意を強ようしたような次第で、斯くてわが邦最初かと思わるるテンター、ゲートが実現したのである。これは沖野博士には直接関係のない話ではあるが、その麾下として金森博士も亦、淀川治水功労者の一人であるから、茲に附記して置くのである。

雑つと斯んな次第で、沖野博士はわが邦高堰堤の土台を築かれた。水力発電界の恩人というべきであるが、宇治川堰堤の出願から許可に至るまで、屢々博士の声咳に接して、その一片の私心なく、眼中唯公益あるばかりで併も所信に忠実なる世の毀誉褒貶などには、一切無関心であられた態度には、熟々敬服の外はなかつたのである。巨星地に墜ちて幾星霜、現今の土木技術界の状勢から鑑みて、当年の博士の毅然たる態度を想起し、沖野技監在りせばの感を抱くものは、吾人ばかりではなかろうと信ずるのである。かくて博士は、わが事業上の恩人で



あると共に、大学に於て博士の奨学貸費を借受けた関係からは、修学上の恩人ででもあるのだが、更にその技術家の師表として仰ぐべき高潔な人格に私淑しては、また精神上の恩人とも思うのである。これわが家の墓参の序ではあるが、毎月博士の黒谷の墓前に稽首して、その冥福を祈る所以なのである。

一もとを手向けまつりて菊白し
白菊の花ふさはしき御墓かな

## 沖野博士の追懐

新開壽之助

自分は新潟県土木課に在職当時、明治四十年春、始めて沖野博士に面識を得たのである。その節は清棲知事時代で、博士が何か用事で県庁に見えられ、自分が知事室に御案内をしたのであつたが、その時の博士の風貌は如何にも率直武骨者らしい内に温情味のあるような感じがした。丁度寒い日であつたが、博士は外套も脱がずに知事と談笑されて帰られたのであつた。その場面の情景からして、その当時の自分には博士が非常に偉大な人物に思われ、なるほど此方が僕等の大親分であるかと自然敬慕の念を起した事を今以て忘れ得ないのである。

その後間もなく、自分は内務省新潟土木出張所に転任して、信濃川改修工事に勤務する事になつたが、これも全く故小柴博士並に沖野博士を始めとし諸先輩方の御蔭に依るものと、常に内心深く感謝して居る次第である。博士は度々工事現場へ見えられたが、何時も御老体にも拘らず、平地は勿論、山間部の嶮岨の所までも、洩なく巡視せられて、現場に就き詳細懇切に、指導啓発至らざる無しと云う有様であつた。われ等所員も亦この熱意に

動かされ、ために感奮興起させられたことは、蓋し尠くなかつたのであつた。何時であつたか、一度渡部地内で長梯掘鑿機下向きの使い始めであつたが、その掘鑿深度に就いての答弁少々曖昧であつたが為に、随分酷く叱られたものであつた。博士の叱り振りは、実に激烈であるのが例であるが、その時を過ぐれば、光風霽月、何処に風が吹いたやら、と云うようなさつぱりしたものであつた。この時も後には「機械の最初の使用は却々六ケ敷いものである。我国最初に使つた掘鑿機は、遂に使いこなせず、何時も横に倒れるから、ヨコスカベーターと云つたよ」などと語られ、大笑いされたこともあつた。こうした態度は全く工事に対する熱心誠意から溢れ出るのであつて、毫も私心が無い。恰も慈父から叱られたような気がして憎悪の念更に起らず、却つて一種の親しみさえ覚えるのであつた。

博士が如何に学殖深く、経験に富み、我国土木界に貢献されたかは、申すまでも無いことであるが、われ等の特に脳裏に肝銘して忘れ得ざることは、博士が実に偉大なる威力を以て、外部からその事業とわれ等部下とを庇護愛育され、われ等部下をして、自由に楽しく、安心して、その業務に活躍せしめられたと云うことである。われ等部下たる者が、この深き理解と、温情慈愛とに対し、かつ又峻烈なる鼓舞激励に対し、如何に強く発奮興起せしめられ、また明るく前途に希望を持たされたか分らないのであつた。これが全日本土木工事を通じての影響は、実に大きなものであつたろうと思う。博士は別に趣味を持たれず、名聞を望まれず、栄達を想われず、唯々専心土木事業に尽さるることと、読書とを楽みとせられたようであるが、この純真無垢の高風と温情とは、永劫吾人の脳裡を去ることは出来得ないのである。



# ありし日のことども

三浦矩明

限りなきなつかしみを持つ故博士胸像の竣功に際し、故沖野博士のありし日のことどもを眼のあたり思い浮べ追慕の情禁じ難いものがある。

今に忘れられぬのは博士が還暦をお迎えになつた年、真紅のネクタイを結んで吉野川へ御巡回になつ時の御風姿である。いつもの温情溢れる御面差で言葉は少なかつたが心から吾々現場の人達を労はりつつ徒歩で次の現場へと向われた。古書に「将接するに礼を以てし、励ますに義を以てすれば則ち士之れに死す」とあるが、あの時の博士のお言葉は若き技術の人達にそんな感じを懐かせるものであつた。当時まだ健脚であられ脚絆を召して居られた様に思うが、その点は確かでない。あまりお顔とネクタイのみに気を取られて居つたから。

桜島が噴火して大隅の国に多量の灰を降らしたのは大正三年一月十二日であつた。が、その直後私が偶々神戸で拝芝の際真先に心配の御ももちで「田中（当時吉野川主任田中吉二氏）の郷里は如何であつたか」、「大なる被害はなかつたか」等々お尋ねを受けたので田中さんから聞いて居つた限りをお答え申したことがあつた。部下憐愛の情深く慈心に満ちて居られたこと常に此の如くであつた。

私が徳島から東京に転じた後は自然温容に接する機会も多くなつた。退庁時刻に折々大手町から神田橋に至る間の歩道でお出合することがあつた。運動のため特に途中まで御歩行になるのだと、人から聞かされたが、御健康の為とは云え、身を持すること如何に格勤恭倹であらせられたかが窺われてまことに奥ゆかしい。

受持つて居つた河川の改修計画と説明書の下書とが出来上つた時お叱りを受けることもあらんかと心配しながら差出した。恐らく技監として指摘したい誤謬や欠点も多々あつたであろうが、課長の校閲を経てあるものには何等の修正をも加えずお返しになつた。蓋し課長に対して「賢を信ずる腹心の如し」との襟度を示されたものであろう。

また吾々が思いがけないような細かい点にも注意を配つておられたこともあつた。故西池氏文氏が長野県から千曲川に関する調査書類を携帯上京し省内にて部下を督し計画案作製を急いで居られた時、私にもその手伝をするよう命ぜられたが、その時にはメモ用紙に鉛筆で上田附近……間、稲荷山附近……間等と一々御自身判断の結果を書いて手交して下さつたので躊躇することなく法線を入れ、土工を計算することが出来た。千曲川改修工事が若し原計画の通りに実行せられて居るならばその幅員こそは実に技監が御自分で決定せられたものである。

斯様にある時は黙して動かず、ある時は身を以て人に先んじ部下を啓発せられたる、洵に綜攬統帥の要訣を心得たものと云うべきであろう。若し夫れ博士の卓越せる識見学殖や遺業功績に至つて私輩の喋々を要せざるところであるから、唯茲に追憶の一端を記して敬慕の意を表する次第である。

# 沖野博士を追想して

谷口三郎

昭和十年十一月二十七日

私が沖野博士に始めてお目に掛つたのは大正四年四月で、土木局勤務となつた挨拶のため技監室に伺つた時である。それから同七年の春大阪土木出張所勤務となるまで同じ役所に勤めてはいたものの自分は当時技師の末席



で直接御指導を受くるような機会は極めて稀であつた。従つて特に深厚な関係を持つておられた三池、名井、真田、坂本諸先輩のように詳しいことを知らないのであるが斯様な関係にあつた私の沖野さんに関する思い出の二三を述べて、故博士の風格を偲びたいと思うのであります。

沖野技監と云えば当時の若い技師の間では迚も八釜しい恐い伯父さんという風に感じられ、技監室に行くには扉の開け立てにも注意するという様子であつた。沖野さんの御気嫌に触れて「阿呆」と極め付けられて憤慨したという話は当時の諸先輩より食堂茶話に屢々聞かされたところである。私は大正七年三月近藤課長（虎五郎博士）から突然呼び出され「今度お前は大阪土木出張所に勤務することとなる、何れ近い内に技監から内命もある筈だが、我儘を云わずに気持よく命令に従わぬと君の将来のためによくないヨ」と親切な御注意があつた。自分は当時道路橋梁の受持で興味をもつて没頭して居つたので、突然河川工事に転換されることを意外に感じたため現在の専門にその儘従事したい希望を述べる積りで技監からの呼出しを待ち受けていると間もなく給仕の通告で技監室に行つた「淀川の工事が始まるので君もその方に行くことにした。主任は坂本技師だから協力して自信のある仕事をせよ、道路橋梁技術も水のことを充分に心得て置かねば駄目だからこれから確つかり水の修業を努めよ」と云う意味のお話であつた「水のことを心得て置かねば駄目だ」との一言と兼ねて先輩から聞かされておつた自信の強い人格に打たれたのとで一言も希望を述べずその儘命に服して大阪に行つたのである。近年頻々として起こる大水害についても故博士の識見の非凡さを泌々と感ずるのである。

故博士が最も力を致されたのは何と云つても淀川改修である。故人の研究に依つて計画が決定されたのは明治二十七年で、未だわが邦では先例もなかつた時代に、今日儼存しているような立派な工事の基本を樹てられ、淀

川治水に対する万代不変の鉄則を創設されたことは本邦治水史上特筆すべき功績である。この工事施行中の御努力は故博士の部下として直接工事に当られた三池、真田、坂本諸先輩から間接に伺つたのであるが、改修計画に関する水理攻究のため苦闘された跡は故博士が直接執筆された淀川高水防禦計画意見書によつて明瞭に窺われるのである。就中琵琶湖よりの流出量を調節して同湖岸の氾濫浸水を救い、且つ瀬田川の洪水量を限定する一挙両得の策を樹てること、大池其他の池沼を封鎖して沿岸冠水の害を除きなお悪水排除の途を開きたること、斯くの如き自然の水理に一大変革を行いたるに拘わらず、よく宇治、木津、桂三川の洪水量を正確に測定して、山崎以下淀川の流路を定め、大阪附近における各派川を調べ、特に大阪港を予想して新淀川を開鑿せること等は何れも一歩誤れば京阪要地の死活に係るのみならず、その禍根は永久に匡正不可能であつて雷に勇猛心のみでは到底成し能わざる重大事である。特に責任の強い故人がこれ等の難関に直面して如何に苦慮されたかは想像に余あるのである。四十余年後の今日その事蹟を仰ぎ見るに、当時故博士の如き偉大なる建設者がなかつたならば、今日淀川の治水は支離滅裂となりはしなかつたろうか、無限の繁栄を誇る大阪港は出現し得なかつたのではなかろうか、各地に行われている治水施設の軌範は容易に確立し得なかつたのではなかろうか、これ等のことに想到するとき、吾々は単に同学の先輩としてではなく、国家の大功労者として自ら頭が下るのである。

故博士に関することで是非この機会に述べたいことがある。それは大正六年に淀川大塚堤防破堤の際のことである。当時諸新聞や世論は何れも改修工事に欠陥ありとして非難攻撃を加えたものである。その間にあつて博士は議会その他必要ある場合の外は一言半句も弁解がましいことを口にされなかつた。大塚切れの真相は同年十月一日稀有の大出水に際し午前五時右岸支川芥川の左岸堤防が淀川改修区域外に於いて破堤したため、大冠村全



村冠水し、従つて大塚堤防に対する水防力が全く尽きて居つた後、午前八時に淀川本川に属する改修堤防が裏法崩れに帰因して切れ込んだためである、即ち改修区域外の芥川堤防が切れさえしなかつたならば改修堤は切れなかつたのである。改修工事関係者として斯様な真のある支川区域まで改修を徹底し得るだけの工費を獲得し得なかつたことについて幾分の責任分担は止むを得ないが、工事そのものの粗漏や欠陥でないことは如上の事実に依つて自ら明瞭である。しかも当時財政上の都合により上流瀬田川より海に至る二十余里の本川改修の大工事を一千五十万円という制限された費用で完結せねばならなかつたために、少さい支川にまで普及し得なかつた。止むを得ざる事情もあるのである。普通の人ならば必ずやその事情を何等かの機会に発表して苦衷を訴えたであろうが、故博士は左様なことには全く超然として只管善後策に尽瘁された。これに依つて見ても如何に故人が偉大なる信念の人であるかを偲び得るのである。

本月二十七日偶々淀川に縁の深い鴨川治水に関する用務を帯びて京都に出張し高西大阪土木出張所長と黒谷の故博士の墓に詣つた際、同所長より故博士の記念胸像が近く竣成すると聞き、欣びの余り帰途車中に之れを記す。

## 沖野博士の回顧

山内喜之助

沖野様は中々の雷様であつて、私時代より先の先輩で沖野様のお叱りを受けない方がなかつたと云うことをよく食堂の茶話に聞かされたことであります。私は内務省へ採用して頂いたのは明治四十四年十二月二十八日でありますが、今の第二技術課の前身の調査課に入れて頂きました。それから二年間調査課に置いて頂いたがその間

食堂で偶に沖野様にお目にかかつたが、別に恐いお方とも思いませんでした。

大正三年四月福田君と共に技監室に呼ばれ、始めて沖野様の声咳に触れさして頂いた訳で、福田君は利根川へ山内は淀川へ行つて貰うからとのことでありました。而して私は引続き淀川下流改修工事の毛馬第二閘門工事に関係しておりました。

その時分沖野様が淀川へ御視察に来て下さつたのですが、現場に閘門の給水弁が横たわつているのを見られ、給水弁は「テンターゲート」式のものであつて、一見変な恰好をして居つたものでこれがお目に止まつた。聞かれる儘にこれは給水弁であると御説明申したところが、給水弁は第一閘門の時に充分研究の結果「シリンドリカルバルブ」が最も良いことになつているのであの儘でよい。なぜ斯様なものを造つたか図面を持つて来いとのことでありました、それで私はさア大変、前から承つて居る雷が今将に落ちるのでないかと思い事務所へ駆け込んで恐る恐る図面を持つて来てお目にかけた次第ですが、一寸図面を見られ、あ―対重が附いて居るな、これならよしよしとて大変莞爾にすたこら青木様、三池様と同道「ランチ」の方へ行かれてしまつたので、現場も一寸見られ別に細かいことを聞かれず、当時は御気嫌がよかつたのであります。

私も予想に反しあの様に好々爺様であるのに、なぜ昔は雷様であつたと云われたのかと不思議に思われたのです。これ全くお年の加減で優しくなられたのであろうと思われて、一寸考え込んだ次第であります。

その後大正六年十月淀川大増水し、大塚地先の堤防が決潰しまして仮締切工事が府で施工中であつた時に、大なる雷を落されたのでありますが、それが最後のものであつたようであります。

私は沖野大偉人には、前述の如く一二回お言葉を頂いたのみでありますから、感想等書く資格もないものであ



ります。諸先輩から沖野様の御人格の高大なりしお話を承つたことが数々ありますが、それは先輩のお方にお譲りしてこれで、失礼さして頂きます。

## 不世出の技監

村山喜一郎

沖野技監からコッピドク叱られた。そのお蔭で以て県是を謬らず、県政に正しく尽し得たことを今なお深く感激し、且また技監の達識に愈長敬を捧げている。私は叱られたことを記す順序として賞められたことを、而してそれが私を知つて下さつた始めである事柄について先きに書いて見たい。それは大正五年第一回土木課長会議の席上私が「落筏路」に関して演述したことがある。和歌山県日高川筋の上越方（カミコシカタ）にある発電水力に於て木材流下の施設として、上から流してくる管流並に筏は発電水力の水路を通し水路の末端と本川との連絡はインクラインを設備すると云うことで許可せられたのに拘らず、その水電会社は既に河水を引用し、発電をしながらインクラインの方は調査研究に名を籍りて一向に施設をしない。そこで管流筏流は止むなく本川廻りをするが、引水後の本川は水量は涸渇し剰さえ昼夜発電力の不同で川へ流す水も変り、即ちスイッチ切替えの都度川の水位に急変化を及ぼし、流材に一層の難渋を来したので、当業者の水電を呪うの声囂々たることがあつた。ここで私も考えた、インクラインの施設も結構だが、併し木材を台車に積込み積卸の労役容易のことでない。殊に筏であれば一度はバラカシ又筏に組むの煩いがある。これは何とか簡単に輸送の途がないものかと、フト気付いたのは山でよく見る山で立木を伐採し、それを下に卸すにシュラといい、丸太で編んだシュウトの上を滑らす、これにヒントを得てインクラ

インを造るべき斜面の処へ試験的に板材で凹字形の溝渠を造り、ここで滑り落すという考案で落筏路を造つた。滑りをよくする為には適量の水を流した方がよいことも判り、一本流しの輸送には見事に成功した。更に進んで組んだ儘の筏を通すことを試みた。最初は多少の失敗もあつたが、遂には筏夫が筏に乗つたまま落差八十五尺のところを無事に乗り切り、かくしてさしも悩んだインクラインもこの落筏路で全く解消したと報告したとき、静粛な会場の一隅から予期せぬ拍手の音を聞いた。何誰かと見たらソレが技監であつた。そして身に余るお賞めの言葉を戴いた。その後技監を甘く見てとつた私は今度も亦大きに賞められると期待をして県営軽便鉄道のお話をしに行つた。当時の和歌山県内の唯一の交通機関は汽船であつた。それも三百屯位の小さい船、風浪で欠航勝ちであり、難破等の海難が頻発した時でもあつたので、陸上交通機関施設の要望切なるものがあつた。縦貫道路を築造せんか、熊野地の山地なれば多額の経費を要す。一層のことソレに軌条費を補足すれば軽便鉄道が布設出来る。資金の低廉、時間の迅速、而して鉄道益金で県の収入を計る。貧弱なる和歌山県では道路をやめて軽鉄、これが理想の名案と思つて既にこの目途のため測量班まで派出して居つたので、このことを得々と弁じ立てたるところ、技監の御顔色は予想外にも段々と苦虫になる許り、遂に大喝、余計なこと構うな、道路をやれとお叱りを受け青くなつて引退つたが、技監には最早この頃から自動車交通の忽にすべからざるを既に察知せられ、道路の完成に心を致されている御真意が分つた。このお諭しを銘じて軽鉄も潮時を見て中止したが、それが県の為よかつたことを今なお感激して居り、そして県営軽鉄を中止したことが動機となつて軽鉄に比べると高級の省営鉄道の敷設を早めたことに与つて大に力あつた事は、も一つ技監に拝謝せねばならぬことと思う。なお道路への御執着は彼の大正十年より起工された京浜、阪神の二大国道工事に顕われ、我国道路築造の範を垂れられたのも技監の御功績であると



洩れ承つて居る。

秀いでた頭脳の持主である技監より見れば落筏路如きは訳もない考案、そして黄嘴の青年の言であればただ黙聴されてよかろうに、態々御賞めになつたのは我国情に適する技術的工夫、所謂国産土木の御奨励の意味とも窺われ、軽鉄で大喝されたるは之が将来を鑑識されたる高邁な御頭脳より見て近眼式の馬鹿々々しき計画であり、なお道路を担当する県技師の本分に戻つた企てなれば強く御叱責将来をたしなめられたことと思わる。以上は技監の御性行のほんの一端を記したに過ぎないが、技監の風手謦咳に接して只々偉大さに敬服するのみで徳望を彼是申上るよりは、私としては不世出の技監と申上るより他に言葉を見出さぬ次第である。

## 沖野工学博士に対する感想

土井八太郎

一、自分は明治十二年より淀川出張土木局に奉職し、同二十三年沖野土木監督署長が大阪に新任されたる始より使われたもので、翌二十四年濃尾地方に大震災あり、木曾、揖斐、長柄三大川の堤防がめちやめちやにこわれ、その他諸川の堤塘、道路、橋梁、樋管等にも大破損あり、巨額の国費を以て復築を急施せらる。時に自分はその工事を巡視して実況を署長に報告すべき命を受け、約半年の間岐阜、愛知両県管内を巡廻しましたが、途次屢々弱震又は強震あり倒壊の為に旅舎なきところも少なからず。この出張は随分辛苦を重ねましたが、この巡視の為に堤防護岸道路樋管等施工上の経験を加え後年府県災害工事設計の査定実施の監督、次では淀川改修の大工事に参加活動するの参考となりしこと少なからず、要するに署長先見の明と任用の厚かりしを感銘して

居ります。

一、明治三十六年淀川改修枚方工場に従務中、淀川に洪水あり、支川天の川破堤す。時の大阪府知事は警察官多数を引卒して枚方へ出張された、これは淀川新堤が破壊したと聞かれた為で、大阪の某新聞紙も淀川の破堤と誤報した。自分はこれを心外に思い署長に書面を送つて新聞社へ正誤を申込みたいと伺うた。その返翰に曰く

目下の如く混雑の際は新聞紙に多少の誤説を掲載候事は到底免るる能わず、併し我が改良工事は新聞紙の誤解位で彼是の評を受けるものにあらず、依て従来当方より訂正等一切為さざる精神に有之今後も同様に付御申越の如きはその儘になし置けば自然疑のはるる期可有之との返事であつた。

是が為に大に意を強くし署長の度量の大きいことに感服しました。

一、明二十九年九月富山県災害工事の査定に出張中来翰に曰く

先月下旬各地再度の大洪水何れの府県も国庫補助申請する由に相見え候就ては富山県の検査は昼夜兼行位の勢を以て速に相運び一日も早く帰署相叶候様被致度本年は実に非常の場合に候間監督署の戦時と相心得勉強被致候様希望致し候云々

とあつて鞭撻された、左なくても昼夜兼行であつて居た処へ更に元気を加え富山から戻ると直に和歌山へ、次に兵庫県、次に滋賀県に移り引続き四ヶ月の間査定の劇務に従事して昼夜活動し一日も休まなかつた。要するに戦時と心得えとの意義深き一句が妙薬となつたのである。

一、淀川改修枚方附近の引堤には随分勉強を重ね、毎年冬期低水の時期を中心として進行せしめることとし十一



月より旧堤を取りこぼち翌年三四月に新堤を築き上げましたが、当時機械の使用少なく、土砂運搬の加き大概人肩によつたもので、使役人数が多く、一工場一日に五六百人より千人位もあり、それを二、三工場を受持ちて昼は駈け廻り夜は帳簿の整頓をなす為に毎夜約三時間位より睡眠せぬ事が三四冬相続きました。人間が食事をせず寝ることもなくば此の上もつと勉強したいと思うた位、従つて相当の成績を上げた積り、然るに故博士はめつたに賞めぬ人で大抵の場合是でよし、それでよし、位が上々吉であつた。人によると叱られたものですが、それでも部下一同が心服して使われたのは人格と徳望が頗る高かつた故と自分は深く敬慕して居ります。

一、大正九年博士が神戸の本邸で静養中送られたる書翰に

恭賀新年

一月一日

年ふとも変らぬ様は我そしる
川にいたせる君が真心

沖野忠雄

土井八太郎宛

附言、此の書翰は掛軸に仕立て家宝として保存して居ります。

# 終生忘る可らざる恩人

市村忠蔵

這般淀川改修工事に偉大なる功績を遺された土木監督署長沖野博士並に坂本博士の胸像建設の挙あり、近々其竣功を見んとするに臨み沖野博士の回顧談を徴されました。然るに博士の公生涯に就ては既に世間に広く認識されて居りますから、これに触れず、この機会に於て聊か私の土木監督署時代に於ける事跡の概略を書綴り以て同博士を追想しましよう。

回顧すれば四十余年の昔、私が初めて沖野博士に謁を乞いしは明治二十六年八月東京より古市博士の紹介状を持つて大阪東区安土町の邸を訪問せし時であつた。その際種々土木社会の実情に就き御懇篤なる御指導を賜わりたる上、当時水害復旧工事施行中兵庫県庁の吉本技師に紹介せられ同県に就職致すこととなり、湊河疏水、その他水害復旧工事に従事中二十七年六月充員召集令に接して応召、踵で八月一日清国に対し宣戦の詔勅下るや即日出征、二十八年八月武運未だ尽きずして本土に凱旋することを得ました。そこで早速その旨を博士へ報告致しましたところ、直ちに上阪せよとの御書翰を辱うし第五区土木監督署の一員に加えられ、下田上砂防工衛所詰となりました。この時私は博士にお尋ね致しました。一体監督署の仕事はいつ頃まで掛るのですか。博士はこれに対し悪いことをせねば終生居られるよと申され、少々面喰いました。

同年十月十七日の休日は朝から秋晴の好き天気であるので工営所の同僚二三と関の津に茸狩を企て、頻りに採り来りては煮且つ焼きして、今や酒を暖めんとせし際、偶然沖野博士と原田、三池両技師と来山せられたので大



いに驚きました。一時は穴を掘つて這入り込まねばならぬ様な気持がしました。併しいやいやと思いかえし、先ず此処彼処と御案内して数籠の松茸を採りたる後酒を暖めて差上げ、大いに欣ばれし事があつた。これが若し平常の日であつたなれば笠台は直ちに左様ならをする処でありましたが、休日のこと故恰度茸狩の先発隊の様な役目を果し、下手の功名となりました。

二十九年四月、私は河川調査測量のため、加古川筋へ出張を命ぜられました。その際博士は私を呼び出張中に罷めるというような事をしては困ると申されました。私は余生を閣下に捧げて居るのであるから、決して左様なことは致しませぬと誓いました。これは当時私設鉄道熱が勃興し、鉄道会社が雨後の筍の如く叢生せしを以て、これ等の会社より誘惑さるるもの往々ありし故、予め釘を打たれたるものと思わる。

三十一年四月淀川改修工事も既に諸準備が出来、漸次工場の増設時代に達しましたので、私は第一工区従務を命ぜられました。当時第一工区主任は三池技師で海老江工場担任は土井技手であつた。恰度エキスカベーターを使用して海老江の低水敷掘鑿を始めたる際でありましたので、同工場の一員に加わり、専心その運用法を研究し能率増進に苦心致しました。

これより三十四年までエキスカベータを以て掘鑿工事に従事して居ましたが、ある日博士が本庄工場へ視察になり、運搬線路に、曲がり錆びたる古スパイキの落ちているのを見付けられ、杖の先にて茲にこんなものが落ちて居るぞと申されしは大いに恐縮致しました。爾来私はこの一本のスパイキを思い出し、万般の工事材料を整理してまいりました。

その後長柄運河（本庄長柄間）の掘鑿、毛馬閘門及び洗堰の築造に携わりましたが、三十七年十二月日露戦役

のため現職のまま召集に応じ、善通寺補充大隊へ入隊中、三十八年三月末日を以て全国の監督署を廃し、大阪には土木出張所を置かれました。同年八月召集解除となり、帰所、鳥飼及び佐太堤防の拡築に従事中四十一年六月神戸港海陸連絡設備工事を経営せる大蔵省臨時建築部神戸出張所へ出向する事となりました。これは吉本技師と沖野博士との談合に由るものでありました。

抑も私が神戸港へ出向する際何だか暗示がありまして、最後には内務省へ復帰するの感を有して居ました、そこでこれを送別会の席上で語りましたら笑つた人もありましたが、後年果して神戸港の修築のため神戸に出張所を設置されて復帰するようになり、神戸港にて遂に無事土木の生涯を送る事となりました。

博士は晩年神戸に邸宅を構え、これに静養せられたが、惜む可し老後逸楽の日永からず、遂に大正十年三月二十六日病を以て薨去せられ、私も葬儀の末席を汚がすを得ましたことは如何なる宿縁にや、ただ有難き仕合と申すの外ありませぬ。

嗚呼博士は実に私の終生を指導された忘る可からざる大恩人にして、骨を砕き身を粉にしても報ずべきであるが、微力非才の私はその万分の一だも酬ゆる事能わざりしは甚だ遺憾の至であります。今や幽明界を異にして如何ともせん術なく、ただ朝夕その恩徳を追慕し甚深の感謝を捧げて居る次第であります。

終



## 跋

三十三年十月　辰馬鎌蔵

大正七年沖野博士は内務省生活に終止符を打ち、下関土木出張所長原田貞介博士を二代目内務技監に推薦す。原田博士は筆者の祝詞に対して「沖野博士が余りに偉かつたので貧弱な技監が出来上つてしまつた」と謙遜に述懐された。その原田技監を金森鍬太郎博士は「沖野技監の遺鉢を継ぐ人は、原田博士の外になし」と推賞した。これは約四十年前の初代、二代の内務技監更送の際の「エピソード」である。

沖野博士は眼光烱々、人を圧する風貌があつた。明治以後土木界第一の先駆者である。博士により計画実施せられた土木工事のうち、特に淀川改修と大阪築港は、その計画の構想雄大を極めたる代表的傑作である。博士の薫陶指導を受けた後進技術者は数百名の多数に上るが、内務省直轄工事に於ては、技監として君臨し、一糸乱れざる統帥力を発揮せるは、その高潔なる人格と卓越せる識見によるものである。その直系の主なる著名人を挙ぐれば左の如くである。内務技監原田貞介博士、丹羽鋤彦博士、内務技監市瀬恭次郎博士、仙台土木出張所長三池貞一郎、内務技監中川吉造博士、第一技術課長前川貫一、東京土木出張所長真田秀吉博士、第二技術課長金森鍬太郎博士、大阪土木出張所長坂本助太郎博士、内務技監青山士等。今回旧交会により編集する内務省直轄土木工事の略史と沖野博士伝が、博士の特に恩寵深かりし、且つ直轄工事に終世を捧げた真田博士の手により、纒められたことは、その意義誠に深し、真田氏は八十五才の高齢にも拘らず、緻密なる頭脳と、透徹せる記憶力を生かし、あらゆる方面より材料を蒐集し、数年に亘り畢生の事業として専念せる、その熱意と絶大なる努力とに対し深甚なる敬意を以し、以つて跋とす。